

戦争体験談

渡辺 了市（昭和5年生まれ）

「『かあちゃん、学校の先生もしょんべん（小便）するんだでね。』と鬼の首でも取ったように、報せた。」と生前の母は笑いながら、子や孫に語ったものです。

1930年生まれの私は、翌年の満州事変からの十五年間を、戦時中の少年として過ごしてきました。徐々に強められる規範で、世の中全体が、それに沿った家庭や学校の教育で「先生の言うことは正しく、神様だ」と教えられ、信じこんできたに違いありません。

そんな私が、旧制の高田中学に入学したのは、1942年でした。その前年、12月8日には、太平洋戦争が始まりました。その上、その年、高田中学は2度の火災で、講堂・控所や、武道場を除いて、焼失してしまいました。

覚悟はしていたものの、講堂を下見板などで間仕切りした急ごしらえの教室で授業を受けました。隣の教室から、大きな教師の声や生徒のざわめきが容赦なく聞こえてきます。

その上、週に何時間かは、500メートルほど離れた旧高田商工（現・南城高校）の教室を借りての授業もありました。こんなことで、落ち着いて学習のできる状態ではなく、最悪の条件の中での授業でした。

私は、直江津からの汽車通学でした。初めのうちは、下駄や足駄でしたが、だんだんと地下足袋。ゲートル・戦闘帽・国防服となり、隊列を組んでの登校となり、先生に会うと、「歩調とれ」「敬礼」と繰り返されました。当然のように、映画館や食堂への出入りは禁止でした。

一方学校では、朝会での「全校一斉乾布摩擦」。柏崎まで行き鉢崎に折り返す。翌年は、糸魚川まで行き、能生まで折り返す「頑張り行軍」。俵かつぎ・手榴弾投げ・長距離走・障害物越えなどの「体力検定」。冬は、砂を靴下に入れ背負って、金谷山での「耐寒スキー行軍」。寒中の朝早くからの「柔道や剣道の寒稽古」などが授業と平行して実施されました。

「頑張り行軍」は、1年生の時と2年生の時経験しました。1年目は、午後10時に学校を出て、北陸道を柏崎まで行き、鉢崎まで折り返すのです。雨が降り、第一関門の鉢崎で、私は脱落してしまいました。

2年目は糸魚川まで行き、能生まで折り返す。この時は、砂利道で車も殆ど通らない当時だから、道中の半分は眠りながらも、何とか完歩できました（約70キロメートル）。ゴールの能生駅前広場は、疲れと寝不足で寝込む生徒で一杯でした。帰りの汽車の中は、全く夢の中でした（完歩者896名）。

世の中はさらに、戦時体制が強化され、夏休みの数日を返上しての「勤労奉仕」が「4か月の勤労奉仕」となり、44年からは「学徒動員体制」で、「通年勤労働員」に。さらに「勤労働員の県外割当」と拡大していきました。

私たちは、当然のように、高田近辺の出征軍人の家や遺族の家への「田植え」。旧鉢崎の信越線「土砂崩れ」現場へと勤労奉仕作業にと従事しました。また、夏休みも「信越化学」で、貨車が

ら石灰石を降ろし、石灰チッ素製造の為のトロッコ押しにも動員されました。

それでも、その間引率教師から、時間を割いての授業を受けた記憶が鮮明です。

また、44年度から、「中等学校改正令」で、修業年限が5年から4年へとなりました。そんな中でも、「5年制に比べて国家担当の意気と実力に於いて、決して劣ることのない生徒を醸成し得る・・・。」との、学校の方針が強く打ち出されました。その結果43年度の4年生と5年生500名中、海兵や陸士などの軍関係の学校や予科練への志願者150名にも達したと記録されています。

3年生になった私たちは、「日本ステンレス」で敗戦の日まで「通年勤労働員」の日々を過ごすこととなりました。上級生は、「トヨタ自動車拳母工場」へ県外動員されました。

鍛造・鑄造・旋盤などに配置され、時には、豪州兵捕虜の強制労働の場面にも遭遇することがありました。

そんな中で、昼食時の“大豆入りおにぎり”1個の特配が、ひもじい思いの私たちにとって唯一の喜びでもあったのです。

また年末からの「豪雪」で、現在のように排雪はなく、欄干を雪が隠す荒川橋を、強風に逆らいながら、滑らないように這って渡った記憶も鮮明です。(私は3月末から海軍関係の学校に入学しましたので、4月からの、より深刻な動員体験はしていませんが...)

現在、教育問題が大きな課題となっています。例えば、「いじめの深刻化」などから、「学校選択制」や「教員評価制」の閣議決定を徹底させるためと称し、従わない教委名を公表するという。従わないものは排除するか、従わせるなど、「思想統制」につながる「管理教育」の方向が露わになりつつあるとの、強い懸念を抱いています。私の少年時代の経験を再びして欲しくないとの思いで筆を執りました。